

後、海運大擴張の後を受け経済界に異常の反動を來し、海運噸に沈没し其の不況の極まるや繋船六萬噸、本會々員にして職を失ふもの、實に三分の一に達し、従て本會の經營慘憺たるものあり。殊に地所建物の購入費の大部分は負債となりて久しく本會の財政を賦し、幹事の任に當るもの、苦心、想像するに餘あり。然れども當時の先輩諸氏の崇高なる犧牲的精神と堅忍不拔の協同心とは克く幾多の艱難を打破し、一方給を割くの幹事あれば一方多額の私財を投じて急を救ふの會員あり、其の經費削減の必要上會報すら發行するを得ざるに至るや、千浦友七郎、大野銈太郎、河邊壽、河内研太郎、曾良登三郎、傍島甲子太郎、祖父江銀次、檜崎猪太郎、村上義親、八木政吉、麓頼助、櫻井桃藏、清水生重の諸氏は壹千餘圓の金員を醸出して會報發行費に充て、殊に賀屋洋介氏の如き前後を通じて五百圓餘を維持費に寄附し以て本會の維持と發展に盡されたり。如斯にして漸く危機を脱したる本會は其後に於て基礎却て鞏固となり其の負債も會員有志より約參萬餘圓を醸出して之を償却し了はれり。

明治四十四年十一月本會の經營上最も困難なりし前後五ヶ年間を専務理事として具

に事職を嘗めたる山田教民病弱の爲り辭任するや齋藤千次郎氏其後を承けて内外に會務を刷新し、又時勢と事務の状況に應じ大正元年十一月長崎、三池、若松、横濱、門司の各地に本會事務取扱所を開設したり。

大正二年三月、從來毎月發行し來りたる、會報を改良擴張し且つ保證金を納付して新聞紙條例の下に刊行すること、し、茲に一般的言論の自由を得以て斯界の權威たるに至れり。

大正二年九月、齋藤千次郎氏辭任し、松本安藏氏専務理事となる。爾來社會的交渉益々熾となり、殊に政府其他より海事行政並に時事問題につき諮問を受け若くは之等に對し意見を提出したる所枚舉に遑あらず。其内最も重要なは大正二年末遞信省が船舶積積測度法會議を開くや松本専務理事は其調査委員となり、又載貨吃水線法の制定、貨物船舶價調査等に關與したること等なるが、此外神戸高等商業學校教授、各造船所技師等と相圖り本會内に海事調査會を設け海事法規及び諸制度等を攻究したり。

大正三年彼の有名なる梅ヶ香丸事件發生するや、本會内に海員擁護會を組織し、基